

## ああトンチンカン……

今回はみんなが儲かると嫌われる例をお伝えしましょう……。と思っただけがGMに関しての思いをもう少し伝えることにした。

本年4月12日の日本農業新聞に「苦渋のGM開国」と韓国でのGMコーンの輸入解禁を伝えたものである。

この記事を読んだ人は畜産用にはGM飼料が使われていない印象を与えるが、そんな不可能なことができないはずがない。スターチなどの食品への利用も考えた、決定済みの話である。記事の終わりに「このような安全性が確認されていないGM作物を子供に食べさせてはいけない、最低30年の実証が必要だ」とあった。

「極東アジアのわが友コリアンよ、お前もか？」と言いたくなる。

現在、この日本で「GM作物の安全性に問題がある」と書くメディアはほとんどいない。現在のトンチンカン反対派の主張は交雑、交配に変わった。

やはり韓国の食文化は、日本より遅れていると言えるだろう。ということは日本のトンチンカン野郎たちのオツムは、左翼たちが馬鹿と呼ぶアメリカ人よりはもっと知能が遅れ

ていることを認識しなければならぬ。いつか冬の問合をしてるんだ？

### 東南アジアの歓楽街に男たちだけで遊びに行かないで、北海道の優秀な農家は家族を連れてラスベガスに行くのが当たり前だ！

「もう少し勉強しろよ！」と言いたいね。日々変化に対応しろ！それができなかつたら何も言うな！現状に甘んじろ！と北海道のHBCラジオの人生相談では毎朝言っている。

北海道の酪農家にはこんなトンチンカン野郎がいる。

北海道北部に住み、関東出身で旧国立大学を卒業して、新規参入したがんばり屋だ。ここまではご立派なプロフィールだが、ここからがいけない、フリーメールを使い、以下のように何度も発言している、彼は「私はGM栽培には反対だ。しかし自分の酪農にはGM飼料を購入している。なぜなら非GM飼料を売っていないから」と発言した。その発言は大嘘だった。

## Vol.3

## GM嫌いは米国嫌い



真正直な私は彼の住む地域である、稚内市近くの大手の雪印種苗の飼料販売担当に問い合わせてみた。こんな答えだった。「昔は非GM飼料のオーダーがあったが、非GMは価格が高いから今は購入している酪農家いたかな？」

事実は非GM飼料の価格はGM飼料よりも15%程度価格が高く、付加価値のない乳製品を販売し

# オレにも 言わせる!

## 北海道長沼発 ヒール宮井の憎まれ口通信

た場合、赤字になると分かっているからだ。

彼にはこの事実を伝え、間違っていたら訂正してくれと伝えたが、現在に至って訂正依頼の連絡や非GM飼料を購入したという話は聞いていない。

もう1人のトンチンカン野郎は北海道東部に1970年代に入植した元事務職で同じく関東マンの話だ。彼は60歳になり娘婿に営農を任せると、ふつうの農家ではできない素晴らしい経営をされているようだが、同じくフリーメールで以下のように発言した。

「GM飼料を使うようになって乳房炎が増えた。きっとGM飼料が原因だから地元の獣医師と1年かけて調査してみる」

知らない消費者の中には「GM飼料が原因で乳房炎が増えた!」と信じる方たちもいるのだろうが、そんな事実無根で騙されるほど世間は甘くない。年間乳量が増え、母体に負担がかかったのが原因であるくらいは、転作農家でも分かることを平気で言う。その態度は醜い。

1年後にメールで「乳房炎増加の原因はGM飼料でしたか?」の返事を出したが、彼からの返事はなかった。そうです、初めから**私みたい**に余計なことを言わなければ良い

のです。

## 米国生産者を犠牲に

昨年11月ドイツ、ハノーバーでのアグリテクニカ(ファームシヨウ)に知り合い5人とオランダ人親子で行った。

オランダ人の知り合いのドイツ人酪農家・フリードリッヒは反GM主義者であった。なぜならGM飼料を使うとモンサントだけが儲かり、我われの農業者としての魂が失われるとゲーテまっ青の詩人のような発言をしていた。話を聞くと何と彼は77年に北海道に農業実習にやってきたそう。そのホストファミリーが現在60歳の前述、道東の酪農家さんだ。私の子供の米国人担当教師いわく、「教育は洗脳以外の何物でもない」とのこと。道東酪農家のドイツ人に対する洗脳教育はうまくいったのだろう。

正直言つてGM嫌いには**変な人種**が多い。共通することは、まず米国嫌いだ。私の農場のように、国産農機具ゼロで90%米国製の農機具の環境をよしとしない雰囲気があるようだ。ヨーロッパ製の方が米国製よりも品質が良い? ヨーロッパ製のサイズ、気象条件は北海道に合っている?

「いったいどこの誰が決めたんだ?」

と言いたい。そんな親たちが子供に英語の塾に行かせて何を学ばせようとしているんだ?

イギリスは英語の国ですよ? はっ?

大切なのはイングリッシュだ。戦後日本の外国語教育の原点は占領国である合衆国政府とコミュニケーションを持つために行なう教育であつて、偏見、差別、貧富の差を生まれながらに生産させることを国策とする、ヨーロッパではない点は強調したい。

昨今のES、IPS細胞を用いた人体臓器再生の可能性などと言われてもチンプンカンプンの話だが、よく読みとまさしく遺伝子組み換え技術を用いていることが分かる。

生きるか死ぬかの現場で使われる技術を我々農業生産者が用いることはいけないことなのだろうか? 医者には免許を持っているが、農家には必要のない程度の頭の悪い集団と自分たちで認めているようなものだ。

昔からある言葉で、**医食同源**の意味をもう一度考えてほしい。食育などと、1人の死者を出していない加工食品にどの様なことをしたら満足していただけののかなどという考えに対して、何か疑問に感じているのは私だけでないはずだ。

GM作物主産地の米国と日本は違

う! 同じ様になるはずがない!

などの論議ではなく、自分たち生産者が与えられた環境と条件の下でこれから何ができるのか、そしてこれから何をすべきなのかを話あつても良い時期が来たのではないだろうか。

TVで米国の農業現場では年間**600人**の死者がある、その**300倍**の負傷者がいて、年間**50人**が穀物事故で生き埋めになると報じていた。

日本は穀物を輸入することは現地の水やエネルギーを輸入することと同じだと言われているが、少なくとも年間50人もの米国人生産者の犠牲の下に、我われ1億2800万人が生きている事実を忘れてはいけない。

何度も言うが、死者がいない穀物の論議と、GM作物を作るメリットのどちらが大切なのかは明らかだ。

農業の一番の問題は耕作放棄地や穀物自給率などと政治の話ではなく、意欲のある生産者(何人いるかは疑問だが)が多く現れ、実行できる環境にできるようにすること。具体的にはGM作物を作る生産者の邪魔をするな!

ということ今年9月1日頃に何か起きる予感がしてきた遺伝子の香りのする街、長沼なのである。